

*古宇田 光¹, 石田 哲也², 一橋 和義³, 新澤 裕子¹, 谷口 沙恵⁴, 殿木 久美子⁵, 平澤 加奈子⁶, 村山 育子⁷, 吉田 芳江⁵, 劉 沙紀¹

¹東京大学 リサーチ・アドミニストレーター推進室、²同 未来ビジョン研究センター、³同 医学部附属病院、
⁴同 社会科学研究所、⁵同 公共政策大学院、⁶同 史料編纂所、⁷同 先端科学技術研究センター

背景

- 第6期科学技術・イノベーション基本計画下で、オープンサイエンス政策が推進
- 大学における実践にあたっては、部署をこえた機関としての協働が求められる

第6期科学技術・イノベーション基本計画
「新たな研究システムの構築（オープンサイエンスとデータ駆動型研究等の推進）」

公的資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方
(2021年4月27日)

学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針
(2024年2月16日)

東京大学の課題

- 多様な分野の研究データ管理・利活用を全学横断的・包括的に支援する体制構築
- 研究データ管理・利活用で各分野をリードする部門が持つ知見やノウハウ共有の場構築
- 日本の将来を担う若手研究者の研究データ管理・利活用リテラシー向上に向けた取り組み

URA連携によるソリューション

- 本部(4名)と部局(54名)の認定URAを中核としたネットワーク型研究力強化体制を構築
- その一環として、研究データマネジメントに関わるURAが連携し全学支援活動を推進
- URAネットワークと附属図書館・情報基盤センターの連携を開始

活動サマリー

◆URA研究データマネジメントWG活動（2021.9～現在）

10分野の研究データ創出から質担保・蓄積・公開・利活用まで情報交換

- 研究データの相互理解により、個性と共通性を抽出
- 今後必要となる人材や、支援の仕組みを検討
- データ量や保存場所に依存したシステムへの要望を抽出

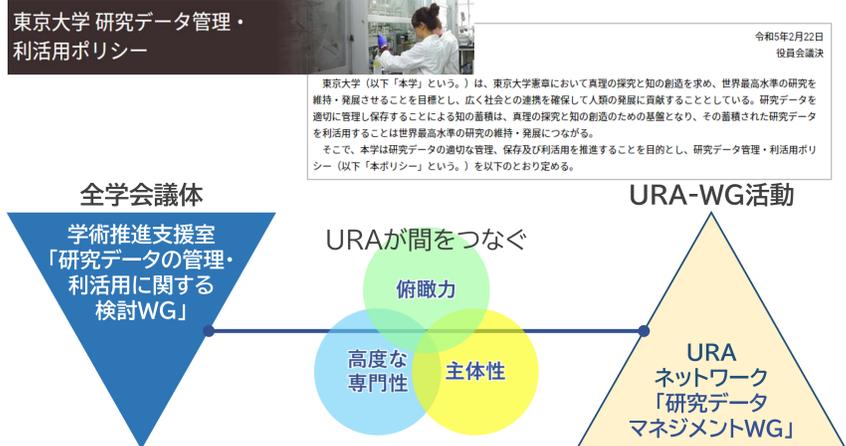
対象分野	データ種別(例)	データ利用目的	実データ	再現・予測	データ信頼性向上手段	個人情報	データ取得時空間		数値モデルカテゴリ				
							データ取得対象空間スケール(m)	データ取得経緯(年)	順序有・単位有	順序有・単位有	順序無・単位有	順序無・単位無	
物質材料(物性研)	物質構造	開発/検査	原子座標	有	ノイズ除去	無	0.00000001	原子	100				○
デバイス(物性研)	半導体特性	開発/検査	伝送ロス	有	ノイズ除去	無	0.00000001	ゲート	70	○			
製品開発(生研)	空力特性	性能向上	空力抵抗	有	ノイズ除去	無	0.01	設計変数	100	○			
ヒトゲノム(医学系)	ゲノム情報	疾患予防/診断/検査/表現型	ゲノム配列	有	解析技術向上・ノイズ除去	有	1.5	人体	30		○		
臨床医療(医学系)	臨床情報	疾患予防/診断/検査/画像データ	検査型	有	データ収集過程の徹底管理	有	1.5	人体	400	○	○		
社会科学(社研CSRDA)	社会調査	学術/教育/データ分析	調査票PDF/調査票データ	無	キューレーション	有	1.5	個人	70	○			○
空間情報(CSIS)	人流	選路/移動/行動/予測	GPS	有	高精度化	有	1.5	人	13	○			
地域気象(先端研)	気象データ	過去～現在の解析	4D解析	有	データ同化	無	3500000	日本国土	30	○			
人文科学(史料編纂所)	歴史史料	社会還元/研究公平性担保	目録情報(宛所/差出等)	無	整理・ノイズ除去	有	3500000	日本国土	1400	○			○
固体地球(地震研)	地震波形	現象理解/予測	計測値/位置情報	有	GPS情報付与	無	10000000	地球	100	○			

明谷 早映子(医学系)、木本 早苗(生研/IRC)、喜多山 篤(先端研)、古宇田 光(URA推進室/物性研)、近藤 恒(生研)、東野 陽子(地震研)、谷口 沙恵(社研CSRDA)、平澤 加奈子(史料編纂所)、RUCシンポジウム発表資料(2021.10)より

◆研究データ管理・利活用ポリシー制定協力（2021.11～2023.3）

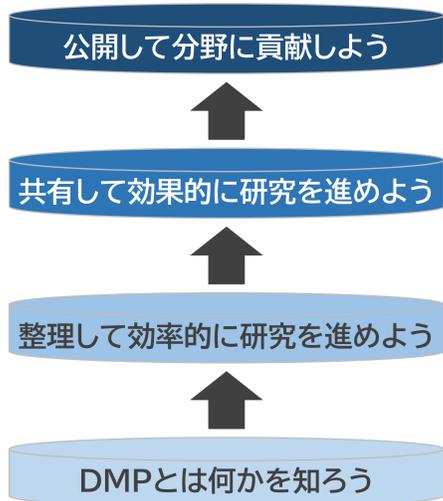
URAのボトムアップの議論をトップダウンの会議体につなげる

- 部局でURAと連携している教員を全学会議体に推薦
- 全学会議にURAメンバーが陪席し、研究支援の経験や各自の専門性から情報提供
- 具体的な今後の支援体制の在り方を協働で検討



◆全学構成員の研究データリテラシー向上への取り組み（2021～）

- 科研費で研究を推進する若手研究者が主なターゲット
- 全学的に意識を高める取り組みを推進



① URA研修における「研究データマネジメント」講義の実施（2021～23）

対象： [学内] URA業務実施者を中心とした教職員(のべ228名受講)
内容： 研究データ管理・利活用の政策、分野の動向、学内の状況

② UTRA Commons(WEB)での情報発信（2023.4～）

対象： [学内外] 分野に共通した/分野に特有の研究データ関連情報を集約
内容：
➢ 研究データ関連ガイドライン・ポリシー等
➢ 研究データの管理・保存・利活用
➢ 研究推進に関する教材



*[本学研究データ管理・利活用ポリシー][URA研修ビデオ][人文学・社会科学総合データカタログ]へのアクセスが多い

③ 「研究データ管理・利活用」関連セミナーの実施（2024.4～）

対象： 公的資金で研究を推進する研究者とその支援者を中心とした教職員
内容
➢ 「科研費交付申請に向けたDMP作成」(417名聴講登録)
(例)： ➢ 「研究データの管理・利活用の実例—分野毎の事例—」
(異なる6分野の事例を2日間にわたり紹介、150名聴講登録)
⇒参加者アンケートで研修ニーズを収集し、提供

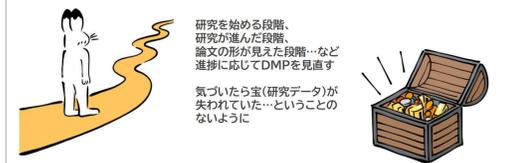
4-2. 研究データの利活用のメリット

- データの公開・共有により、研究データを重複して収集(作成)することを避けられる
- 既存の研究データを第三者が利用することで、研究の促進、さらなる発展につながる
- 第三者のデータ利用が一次データ収集(作成)者の研究の再評価につながる
- 分析しつくしたと思われるデータも、別の研究者が扱うことで新たな発見があることも
- 研究費を持たない学生や若手研究者が、公開されたデータを利用して研究を進めることができる

「研究データマネジメント」谷口沙恵(社研CSRDA)、URA研修録(2023)より

最初から完璧なDMPはない

「DMPの作成は、必要書類を埋めることが目的ではなく、研究データを長期的、安定的に保管する体制の構築が目的なのだ。DMPについて熟慮すること自体が重要なこと」

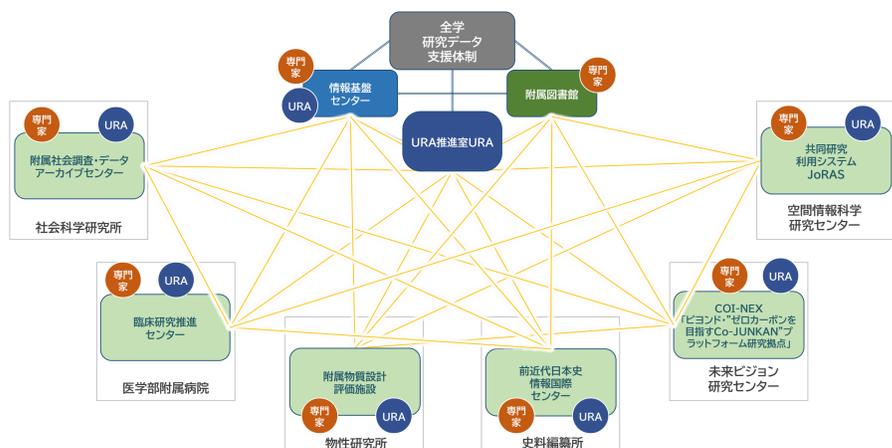


「科研費交付申請に向けたDMP作成」新澤裕子(URA推進室)、研究ポストセミナー「Open Scienceの歩き方」シリーズ第1回(2024)より

今後の研究データ駆動型研究促進に向けて

◆URA×専門家による研究データ管理・利活用支援体制の構想

学内の専門家によるセミナー実施を継続して実施
⇒URA×専門組織のネットワークを拡張し全学研究支援体制構築を構想
※下記は「研究データの管理・利活用の実例—分野毎の事例—」セミナーの講師が所属する部局/部門を例として記載



◆さらなる研究データ管理・利活用の振興に向けた取り組み

課題：科研費取得者等、若手研究者に対してのアプローチは不十分
東京大学における科研費課題数(例)(2024年度)
特別研究員奨励費:1,445件、若手研究:898件、基盤研究(C):1,058件
⇒興味を持っていただくきっかけを作るための楽しいイベントを検討

UTRA Commons上で「研究データ川柳」コンクール実施検討

<川柳を投稿して参加>

- 年間を通して、研究データの管理・利活用に関連した川柳を募集
- 四半期毎(例)に集まった川柳をWEB上に掲載し周知
- アンケート投票数で最優秀賞・優秀賞などの賞を決定
- WEB上で公表(作品と雅号(ペンネーム))

<川柳に投票して参加>

- 四半期毎(例)に公表される川柳のうち共感するものに投票

*投票への参加から投稿への参加に導く
*投稿された川柳や投票結果から、研究データ管理・利活用動向を把握

Forms上でテスト事業開始!(求めには すぐに応答 URA)

QRコードから
今すぐ参加!

